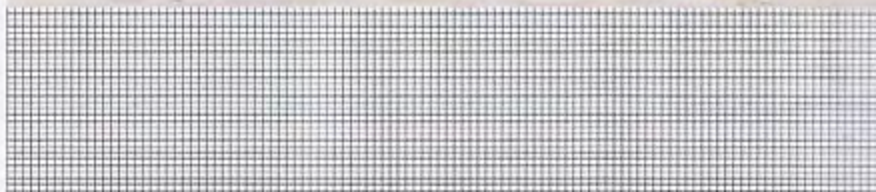


沖

1
2019

俳句雑誌[おき]



はぐれ鴨

能村 研三

年頭所感

今年の干支は「己亥」である。「沖」としては創刊五十周年となる一年前の年で、いよいよその準備に拍車がかかる年である。

昨年は私ごとでは一昨年亡くなった妻の母の忌明けを待つて次女麻衣が春に、長女美緒が秋に相次いで結婚と慶事が続いた。

「沖」では句集上梓が相次ぎ、杉本光祥さん『峰雲』、田辺博充さん『放課後』、大沢美智子さん『旬日』、内山花葉さん『沸点』、小栗八重さん『春裕』、菅井悦子さん『紺法被』、鈴木基之さん『坐忘』、望月晴美さん『ひかりの器』、井原美鳥さん『分度器』と九冊の句集が刊行された。この後も大畑善昭さん、須山登さん、佐々木よし子さんが句集刊行を準備されている。

十一月の下旬には勉強会が京都で開催され、全国から多くの同人、会員が集まり収穫の多い勉強会となった。久々に関西地区で勉強会ができたこともよかった。

勉強会の少し前に行われた市川市の市民俳句大会には九十六歳になら

朴落葉搔きて梢を仰ぎゐて

想像と違ふ人来るしぐれ来る

利酒を凌ぐ妙齡神の留守

八手咲く日和くづれの蟹の路地

鬼 柚 子 を 採 つ て 貰 ひ し 遍 路 道

初 し ぐ れ 京 に 七 口 あ り に け り

刃 と 串 の 手 捌 き 冴 ゆ る 式 包 丁

哲 学 の 道 や 沈 思 の は ぐ れ 鴨

紅 葉 散 る 一 葉 を 許 す 銀 沙 灘

師 走 朔 日 俎 の 音 か た き か な

れる同人会顧問の湖上千津さんが出席され、車椅子に乗りながらも演壇で豊饒と講評されたことも嬉しいことであった。

ところで今年の干支の「亥」は父登四郎の干支で、生きていれば百七歳になる。父は亥歳らしく「猪突猛進」などころがあった。

一月五日生まれであったせいも、父は新しい年を迎えると元旦のお節料理を家族一緒に囲んだ後、一人慌ただしく成田山詣に出かけた。特に成田山信仰の信者ではなかったが、いづしか元旦の父の慣習となっていた。帰りには大きな達磨を買ってきた。沖が繁栄することを祈願した。江戸っ子らしい験担ぎだったのかも知れない。

今年沖が十三日に新年俳句大会が、また俳人協会は十五日に新年の集いがあり、いよいよ改元の年の一年が始まる。今年も冲衆と共に元氣で句作に励む年としたい。

高梯子

森岡 正作

嫁入りの道まだ残り臭木の実
雪来るか越の空突く高梯子
炬燵置き婆の権勢定まれり
ひと刷毛の時雨や旅の始めなり
冬晴や尖れるものなほ尖れ
紅葉酔ひして哲学の道惑ふ
底冷の灯を斬り畳む式包丁

板前は

俳句に於いて、私の恩人の一人である松木実さんは、私の勤務している高校に校長として赴任して来られたのであるが、退職時に「私が第一の弟子になるから、俳句の会を作つて教えてもらいたい」と言われた。それが後に「出航」へと繋がった。

もちろん「沖」へも紹介したところ、めきめきと上達し、へ麦の秋焼いても父の骨太し」で特選を得たり、へぐいぐいと島たぐり寄す遠泳子」で、「沖」の二十周年大会の一位にもなった。そして晩年にはへ白髪教へ子に逢ふ星祭」という良い句も見せてくれた。

教え子に詠んだ句としては登四郎先生にへ板前は教へ子なりし一西」という名句がある。私も多くの教え子に恵まれているが、先生や松木さんのようにはとても作れない。俳句に詠める出会いを、みすみす見逃しているのかも知れない。

能村登四郎の軌跡〔5〕

能村 研三

唇緘ぢて綿虫のもうどこにもなし

『定本枯野の沖』昭31

『合掌部落』を上梓後、俳壇からの反響をよそに自らが「冬の時代」と言わしめる時期の句で、登四郎は「この句を思い出すと今も胸が痛む。この時の苦澁を思い出すからである。作品は昭和三十一年の冬である。前年、句集『合掌部落』を出した。そして第五回現代俳句協会賞を受け、好調の波に乗ってよい筈だったが、「何となく心が晴れない日々がつづいた。」とこの頃の心境を吐露している。下五が六音になっている句だが、宙に消えた綿虫をなお追うような視線が感じられ、それが心の動きにつながり字余りの効果をあげている。

教師に一夜東をどりの椅子紅し

『定本野の沖』昭32

東をどりは東京新橋の芸妓による春の踊りで、京都の「都をどり」にならって始まったとされる。芝居好きの登四郎であったが、「東をどり」は芸者の踊りでひいきの旦那衆の見るものだと思っていて、家庭教師をしている子供の親からの招待されたものだったそうだ。ここで詠まれた「紅」は待ち侘の色や新橋演舞場辺り一帯の華やかな紅色で、教師として登四郎が見た一種奇異な世界への驚きがかがえる。登四郎の「冬の時代」の句の中の地味な色合いの中にあって異色の色彩のある一句である。

曼珠沙華胸間くらく抱きをり

『定本枯野の沖』昭32

曼珠沙華は登四郎にとって好きな花の一つで多くの作品を詠んでいるが、この句が句集に収められた曼珠沙華の最初の句である。この句について登四郎は「不吉な花だが曼珠沙華という花は何故か心を惹かれる。この花束を抱いた少女の胸の碯のくらさを画家の眼で描いてみた。」と述べている。登四郎は若い頃田端で暮らした時代があった。家は現在の田端文士村記念館のあたりで芥川龍之介などの文筆家の他に洋画家が多く住んでいて、洋画家に憧れていた時代があったそうで、登四郎には画家としての視点で作られている句がある。

火を焚くや枯野の沖を誰か過ぐ

『定本枯野の沖』昭33

「冬の時代」から脱却すべくもがき苦しんだ上にできた句、と言っても過言ではない。『台掌部落』時代の社会に向けた視点から、大きく転換し自分の内面をみつめ、精神の彷徨を続けた末にふわっと泡沫のように生まれた句だとも自解している。難解句で様々な鑑賞がなされているが、この作品を初めて評した人は滝春一だったそう。登四郎にとっては新しい境地を生み出す大きな変換点となった句であることは間違いない。昭和四十五年「沖」誌発刊の誌名由来句であり、市川のじゅんさい池公園に句碑が建立されている。



蒼茫集



生きぬく力

望月晴美

みひらきて

洲上千津

*ときめくは生きぬく力吾亦紅
一書成ることも佳きかな花八つ手
萩の花くくりてあたり軽くせり
自転車に乗る芒野の風にのる
いつとなく梨の畑も冬の空
冬支度暮しの知恵は生きる知恵

立冬の山河晴れたり胸中も
石投げて波紋みてゐる冬日向
*枯れ菊を焚くや心眼みひらきて
胸中に時を待つこと冬木の芽
非は吾にありしか冬のひとつ星
父母恋へば炒り銀杏のみどり透く

火恋し

甲州千草

富士見ゆる間

頓所友枝

*朝霧を吸うて漬物石沈む
貰はれて来し大根の反抗期
冷まじや東京は傘要らぬ街
笈摺の朱印の滲み菊日和
火恋し素手には痛き櫃の肌
一切の音遠ざけて夜長酒

葉隠れに柿の色づく子の忌日
小鳥来る 柂目柱の長廊下
酒となる米の真白や雁渡し
*秋惜しむスタインウエイの細き脚
神の留守身に棲む菌の善と悪
冬晴や富士見ゆる間の格天井

情 念 内山照久

* 一木の情念溢る紅葉かな
彩 尽くし全き容毒茸
闇に穴穿つ槌音鉦叩
これからは各駅停車吾亦紅
月光に磨かれてゐるレールかな
秋深し書肆と酒肆ある神保町

面付けて 能美昌二郎

文楽の声なき嘆き文化の日
面付けて面を商ふ秋祭
反抗は大人の兆し新松子
朝霧のとざす一村鹿威し
新蕎麦や小声でたのむ昼の酒
* 色なき風音なき音を聴く空に

喜 色 大畑善昭

足軽く花野の精となる老女
童女らよいちやう落葉を振りかぶり
* どんぐりの喜色をつつみゐる夕日
早地峰は藍濃く小春日和かな
呼べばすぐ小春の山がおおと言ふ
冬日和日時計に昼過ぎやすく

甘 飯 千田百里

* 一人一舟近くて遠く鯨を釣る
小鳥来ていい風の来て酌む時間
豆乳の湯葉となる間や小夜しぐれ
甘飯うまいを噛んで十一月終る
鳥籠とこに何説く懐手の夫は
透明は幸呼ぶに似て葛湯溶く

潮鳴集



ぱりつと

菊地光子

髭題目

稗田寿明

*新海苔をぱりつと今日の予定組む

河馬の口四角に開いて秋日燦
行く秋や音なく刻む万歩計
月曜は図書館休み木の実降る
先客の紅葉一片木のベンチ

清しき衿

安藤しおん

*さはやかに髭題目の伸びにけり

円卓のやうな切株小鳥来る
実むらさき紫雲のしづく散らしをり
残業の窓一枚の後の月
和菓子屋の向かひ和菓子屋文化の日

榧の実

栗坪和子

野猿目こぼし奥美濃の柿届く

円ら瞳の「天気になあれ」吊柚餅子

*一葉忌清しき衿とすれ違ふ

語りかけ鮎ほぐす武骨な手
滑空のまま風を呼ぶ鴟の糞

*枝離る朴の葉のこゑ聞きとめし

夕月の円環見えて左近詩碑
稿を待つ鎌倉に月あがるまで
榧の実のころげ出づれば深空あり
冬に入るしづかな海の忘れ潮

飛鷹選評



能村 研三

垂るる柿己が重みに気づかざる 鈴木 光影

秋の日差しを受けて木に残った柿の実が美しく輝いている。実をたわわにつけた柿の木にはとても豊饒感があつて、見ているだけで幸せな気分になる。柿の実がたくさんつきすぎるとその重さで枝が撓う。柿の実を擬人化した句で、秋の空はどこまでも高く澄みきった中、多くの実をつけた柿の木はその重みなど気にすることもなく、存在感をもって立っていた。

気付かざるほどの主張や 吾亦紅 川高郷之助

吾亦紅の花に派手さはないが、赤紫の小さな頭を風に揺らす様子がかわいらしい。秋の名草として古くから知られる花だが、花と言うには花びらと言えるようなものも見えず、これが花だと知らなければ実ではないかと思ってしまうようでもある。それでも吾亦紅はそれなりのささやかな主張をしていて、注視してみなくては気づくものではない。

かはたれの光を寄する薄かな 仲里 貞義

夕方を「たそがれどき」と言うのに対して「かはたれどき」は明け方の時間帯をさす。あれはだれだとはつきり見分けられない頃という意味からこの名がある。箱根の仙石原あたりの薄原であろうか。明け方のほのかな光が芒原に寄せて風になびいていた。

雨に色深めて今朝の実むらさき 伊藤よし江

実むらさきは低い山の林の中や野原に自生する。夏に葉の付け根に小さな淡い紫色の花が群がるようにつけるが、美しいのは実で、熟すと紫色に輝き、その美しさを紫式部になぞらえて「紫式部」とも呼ばれる。秋も深まり、雨に濡れた実むらさきはより一層鮮やかに見える。

詠めず書けず誰も来ぬ日や冬に入る 坂下 成紘

「詠めず」「書けず」「誰も来ぬ」とややネガティブな畳みかけた表現に、一人の人間の孤独感と無聊感がある。坂下さんは北陸の方だが、やがて雪に閉ざされる冬が近づくとこんな気持ちになるのかも知れない。

生きるとはこゑ上ぐるごと鳥渡る くとつひろこ

遠くの空を見上げると、鳥たちが渡つてくる様子は見えた。はるかかなたから群れをなし羽ばたく鳥の姿は、作者が瞬くたびに力強く大きく迫ってくる。自然の鳥たちの動きに勇気づけられるであろう。(以下略)

『ひかりの器』

(自選二十句)

望月 晴美

光年の瞬のはなやぎ桜舞ふ
花ふぶき真青な空の贈物
信濃路の春風まとふ連袂碑
贈られてカーネーションのある暮し
二万歩の太陽浴びし髪洗ふ
「あなたでしたか」逆光の白日傘
葬といふ不思議な活気水木咲く
とつぜんに子の一家来る豆御飯
生くるとは力出しきる土用波



地球儀に子の居場所知る夜の秋
曼珠沙華夫の一世の色ならむ
もういいと思はぬことや秋の蝶
海といふひかりの器鳥渡る
朴落葉し尽してふと先師なる
雪搔きす白にとてつもなき重さ
今日は今日の力尽して冬の蝶
寒波くるらし雑巾の堅しぼり
大寒のところに楔強く打つ
わが編みし亡母のセーター我が着る
除雪車の白き闇夜をぬけてくる

『放課後』

(自選二十句)

田辺 博充

岩戸寺や雲の中なる山ざくら
句碑を得て一山霞み易きかな
かかる夜は木葉木菟守る国東塔
山清水酷使の錠を浸しけり
忘れざるかの放課後の雲の峰
河骨は誰かが捨ててゆきし恋
向日葵に背中見せたくなかりけり
滝壺に水青あをと蘇生せり
夜は鹿のための橋あり両子谷



追憶をぬくめゐる掌の胡桃かな
触媒のやうに今日まで生きて秋
鬼やんま仏間へ何をしに来たる
多分わがランゲルハンス島も秋
助手席に寝かす花束文化の日
地球酔ひかな銀漢に見蕩れゐて
くにさきや銀河しづかに氾濫す
ケ・セラ・セラたとへば冬の烏瓜
さきがけて裸木となりかく静か
俯瞰して東京といふ大枯野
待春のマラカスちよつと振つてみる

『旬日』

(自選二十句)

大沢美智子

伊能図の山河顛ちたる淑気かな
いつの間に二重瞼やお年玉
うちの娘でゐる旬日の雛かな
学校に灯の入るまでを夕桜
天平の踏歌きこゆる揚雲雀
春愁や壁画の中に棲む鳥も
雪解川岸辺に立ちて誰も無口
レガッタや覇者の余韻の流し漕ぎ
仰臥して歌書や俳書や緑さす



祭帯けんくわ結びの跳ねたがる
鮎の宿昏き廊下を渡りけり
夜の秋明日ゆく山にルーペ置き
種零しこぼし鶏頭影細る
秋澄めり山河アイヌの名を持ちて
秋冷の子規の描きたる子規の貌
いのち継ぐべし山毛櫨の実は地に刺さり
木枯や縞馬は縞寄せ合つて
石路の花殉死の墓に序列あり
万両や昼過ぎて開く骨董屋
琉金の鱗すきとほる夜の雪

『沸点』

(自選二十句)

内山 花葉

雪降るや空気しづかに重くなる
麦の芽の風に逆らふ力あり
納税期高さ揃はぬ椅子に掛け
走りつつ児の風 無限大 描く
花冷の息整ふる一の弓
武蔵野の沸点桜ふぶきかな
千年後も花散りをらむ石舞台
神の領域超えし原子炉海市立つ
晩年の未知へ葉桜くぐりけり



ジュラ紀より立ち泳ぎして子子は
肘でみる産湯の加減土用あい
吾を入れて地球は青き金魚玉
白さるすべり百歳の死は水のごと
トマトのやうな笑顔で負けず嫌ひなり
秋われも発酵途中もろみ蔵
泣くことが言葉よ烏瓜まつ赤
りんごむくうさぎの耳をたててむく
眠らんとする泥揺すり蓮根掘る
原始鳥類の骨かと蓮の枯れきつて
弦は風ストラディバリウスなる冬木

年間二十句

(自選二十句)

稗田 寿明

しづかなる正午日本の敗戦日
鹿ヶ谷南瓜座禅をしてゐたる
遺伝子の旅のはじまり草の絮
たまごかけごはん勤労感謝の日
0番線ホームの先の枯野かな
子は恋の取札遠く飛ばしけり
書き出しのインクの濃かり寒の明け
丁字路にぶつかつてゐる春北風
バックして車庫より出づる余寒かな



水菜盛るひと掴みまたひとつまみ
ひとひらを追ふひとひらの花を追ふ
青き踏む第六感の覚むるとき
漆黒の額装のごと畦を塗る
ジパンの妻と子ならぶ夏隣
編み上ぐる家族のかたち鳩浮巢
野あやめの屹立としてゐたりけり
てつぺんに続きありけり立葵
アイスクャンデー木の棒は木の味したる
てのひらの汗にはりつく設計図
水あふるトマトぶつかるたびあふる

年間二十句

(自選二十句)

栗坪 和子

いわし雲おほひて余る安房の国
松手入れ日のあるうちにと言ひながら
菊膾月のしづくを啜るかに
錦繡を織り候ふと山装ふ
照柿や安房は夕日の美し国
毛糸編む針目に時を掬ひつつ
命あまさず生きよと波郷冬木佇つ
黒潮は海の街道鯨来る
なづな打ついのちのみどり敲くかに



節分や梁に錆びたる鯨鮎
けふの日はけふの風紋鶴帰る
春雪や加賀友禅師に筆百本
三月の海風とほす通し土間
遣唐使絶えて千年雁帰る
網元の土間は卯波へつづきけり
搾乳の桶にれんげの香りせり
名の消えし房総西線菜殻燃ゆ
掌の中の水ごと鮎をもらひけり
芭蕉布に珊瑚の海の香りせり
錆鮎やどつと夕暮せまりたる

沖作品



能村研三選

垂るる柿己が重みに気づかざる
 高きより御釣賜はる三の酉
 屋上をビルは隠して秋高し
 小さき虫集まり来たる日向ぼこ
 一字を積み一紙を重ね冬ぬくし
 秋思かな書架に溜めたる未読の書
 気付かざるほどの主張や吾亦紅
 楽章と楽章に透き虫しぐれ
 冬ぬくし辞めても届く社内報
 大らかに細りゆくなり懸大根
 パドックの千の眼や雁渡し
 かはたれの光を寄する薄かな
 柿くへば昭和を残す甘さかな
 人道と鉄路のあはひ泡立草
 小春日の影を畳に長うせり

東京

鈴木 光影

埼玉

川高郷之助

仲里 貞義

* 灯台に円き地球や鳥渡る
 雨に色深めて今朝の実むらさき
 灘風の意のまま一日真葛原
 豊の秋庭をちこちに子連れ矮鶏
 山峡に朝日集めて枇杷の花
 * 北国を忘れさせたる小春かな
 風もまた枯野を急ぐ一過客
 弛びなき城石垣や蔦紅葉
 断捨離と決めて抄る冬用意
 詠めず書けず誰も来ぬ日や冬に入る
 * コピーしてゆがむ自画像そぞろ寒
 生きるとはこ糸上ぐるこ鳥渡る
 笹鳴や仏あつまる恐山
 籠もり堂木つ端積まれて冬に入る
 竜の玉飢餓海峽の青成せり

千葉

伊藤よし江

石川

坂下 成紘

青森

くどうひろこ